慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アッシュダウンの戦い再考
Sub Title	Postscript on the battle of Ashdown
Author	小田, 卓爾(Oda, Takuji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.174(215)- 187(202)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アッシュダウンの戦い再考

小　田　卓　爾

（1）

紀元871年，イギリスを席巻していたヴァイキングが，ウェセックス王国の中核に迫りつつあった。『アングロ・サクソン年代記』（以下『年代記』と略す）は，この年，ウェセックス王国において九回の戦闘が繰り広げられたことを伝えている。その三番目は，一月八日ごろ，アッシュダウンにおいて戦われた。このアッシュダウンの戦いを，アルフレッド王の兄エゼルレッド王の末裔を自称するエゼルウェアルドは，十世紀末に書いた『エゼルウェアルドの年代記』の中で，「サクソン人が武力でブリテン島を獲得して以来，後にも先にも，これほどの殺戮を耳にしたためしはなかった」と記述している。それほど激烈な戦闘であった。デイン人のヴァイキングは，二手に分かれた。そして，一方の軍団は二人の王が，他方は族長らが率いた。これに対して，迎え撃つウェセックス軍は，王の軍団には兄王エゼルレッドが，族長の軍団には弟のアルフレッドが対戦することに決定した。

アッシュダウンの戦いは，エゼルウェアルドが叙したように，比類を見ない激越なものであり，それゆえ多くの人々に語り継がれてきた。碩学H. R. ロインは「これは，若きアルフレッドが彼の評価を確実なものにした戦いであった。アッサーが語るところでは，彼は単独で戦闘を開始した。兄王エゼルレッドは，デイン人の軍団が視界にありながらミサに耳を傾けるばかりで，戦いが終決するまで戦闘に加わろうともしなかったのである」と述べている。このロインの見解は，アッシュダウンの戦いに対す

る定評を代表するものと言えるであろう。さらには，大衆的な伝承も生まれた。つまり，アッシュダウンに比定される地域は，バークシャー丘陵地帯の一角にあり，丘陵の北側の斜面，丁度アフィントンの村を眼下に望める辺りに，緑の芝を切って白馬の麗姿が描かれている。いつしか，この一帯がアッシュダウンの戦いの戦場であり，アフィントンの白馬はアルフレッド王がデイン人との戦闘に勝利した記念に戦場に刻んだ，という伝説が語られるようになった。アッシュダウンの戦いは，今日，物語風に「白馬の戦い」とも呼ばれている。もちろん事実ではない。この白馬は，先住民族のケルト人が初期鉄器時代に制作したものである。

このように，学術的な見解から伝承的なところまで，アッシュダウンの戦いはアルフレッド王に事寄せて語り継がれてきた。すなわち，「若きアルフレッドが単独で戦った」「兄王エゼルレッドは祈禱に専念して戦闘に加わらなかったから」「アルフレッドがウェセックス軍を勝利に導いた」など。そして，「この戦いは若きアルフレッドの評価を確実なものにした」ことになっている。

（2）

しかし，アッシュダウンの戦いを最初に記録した『年代記』は，アルフレッドの功績については全く触れていない。冒頭で描写したような戦闘体勢をとり，デイン人側の王一人と五人の族長が倒れたこと，そして，敵軍の両部隊は敗走し，戦闘は夕暮れまで続いたこと，などが100文字で述べられているだけである。確かに，九回の戦闘の中では最も多くの字数を費やしてはいるが，ウィルトンの戦いについても88文字で書いており，アッシュダウンの戦いを特筆したとは思われない。

アッシュダウンの戦いを特別な思いを込めて記録に留めたのは，アルフレッド王がウェイルズの聖デイヴィッズから招聘したアッサーであった。アッサーは，紀元893年ごろ，『アルフレッド大王伝』（以下『大王伝』と略す）を著わした。彼が典拠としたのは主に『年代記』であったが，いくつかの事件については目撃者の立場から詳細な叙述を試みている。アッシ

ュダウンの戦いの場合にも，それが言える。この戦いについては，アッサーは455文字を費やして戦況を詳細に活写した。ちなみに，彼は紀元871年の戦闘を八回と記している。しかし，ウィルトンの戦いは約100文字を用いて細部の描写を行なっているものの，他の六回の戦闘に関しては年代記的な簡潔な記述で済ませている。これを見ても，いかにアッサーがアッシュダウンの戦いに特別な思いを抱いていたかが分かるであろう。

アッサーのアッシュダウンの戦いの叙述は，三つの部分から成り立っている。最初の段落は，前述の通り，二手に分かれたデイン人の軍団に対抗してウェセックス軍も兄王エゼルレッドとアルフレッドの指揮する二つの軍勢に分割したこと，そして，兄王が祈禱に耽るばかりで腰を上げないこと，についてである。ここで着目すべき点は，アルフレッドは兄王がミサに聞き入っていたために「兵士とともに，より迅速にして周到に戦場に軍勢を進めた」こと，また，兄王については「このキリスト教徒の国王の信仰心は，しかと主のおそばにあった」ということである。次の段落の冒頭部分の内容は最初の段落の反復である。続いて，アルフレッドが軍勢を進めた動機が述べられている。デイン人の軍団が戦場に姿を現したために，アルフレッドは「当時，まだ副将であったが，もはや，戦場から撤退するか，兄王の到着を待たずに敵軍に攻撃をしかけるしか」敵軍に抗すすべはなく，神のご加護を信じつつ軍旗を進めて行った，というのである。注意すべきは，やがて祈禱を終えた兄王が戦場に到着し，「主にご加護を祈願すると，直ちに戦闘に加わった」という点である。つまり，兄王が参戦した時点では，戦闘は終決していなかったのである。最後の段落は，主として戦況についてである。まず，戦場が不平等であったという。すなわち，デイン人の軍団が高地を占め，ウェセックス軍が低地から戦った，というのである。ここで，アッサーは興味深い事実に言及している。その戦場には一本の茨の木が立っていて，その周辺で戦闘が繰り広げられたというのである。その木を，彼は「この目で見ている」と断言している。また，戦闘の目的も明かにされている。デイン人の異教徒軍は「悪事を旨」とし，ウェセックス軍は「生命と愛する者と祖国のため」に戦おうとしたのであ

る。結局，神の裁きによって，デイン人らは敗走する。戦闘は夜まで続き，翌日まで壊走を余儀なくされたデイン人もいた。

さて，アッシュダウンの戦いを最初に伝えた二つの記録である『年代記』と『大王伝』を見ても，この戦いとアルフレッド王との関わりは，広く信じられているような状況ではないことが分かる。すなわち，「兄王エゼルレッドは祈禱に専念していたから」この戦いを「若きアルフレッドが単独で戦った」のは確かであるが，それは緒戦だけであり，戦闘の重大な時点では兄王エゼルレッドが参戦していた，と考えざるを得ないのである。なにしろ，戦闘は夜まで終決せず，翌日に持ち越されるほど長引いたのである。「アルフレッドがウェセックス軍を勝利に導いた」ということを伝えた記述も見当らない。ウェセックス軍がこの戦いに勝利を収めたのは事実であるが，アルフレッドが単独で勇敢に進軍したことが述べられているだけで，勝利への経緯が詳述されるのは兄王が参戦したあとである。このように，文脈から判断する限り，アルフレッドが単独で勝利したと考えることは不可能であり，その戦果は兄王とともに獲得した，と見るのが穏当であろう。文意の汲み方によっては，兄王が指揮して達成した戦勝と解釈することも不自然ではない。従って，「この戦いは若きアルフレッドの評価を確実なものにした」といった理解の仕方は，きわめて根拠の薄いものと言わざるを得ない。

アッサーが，兄王の「敬虔さ」を称賛していることは間違いない。一方，若きアルフレッドを称賛しているとすれば，直ちに進軍を決意した「即断」と「勇気」である。『大王伝』全体を通して，アッサーがアルフレッド王の業績を称揚する趣意は顕著であり，アッシュダウンの戦いの場合のみ彼の行為を否定的に描いたとも考えられない。とすれば，アッサーは，このアッシュダウンの戦いの場面において，「神への奉仕を放棄してまで人間に奉仕する気持にはなれない」と祈禱に専念した兄王エゼルレッドも，まだ副将でありながら「兄王の到着を待たずに敵軍に攻撃をしかけた」若きアルフレッドも，両者とも称賛したことになる。この二重価値的（アムビヴァレント）叙述を試みたアッサーの態度は興味深い。物事の黒

白を明確にとらえる中世的価値観からすれば，むしろ奇異とすら言えよう。この場面の筆を進めているとき，アッサーの内面には何かが動いていたと思われる。

（3）

同じころ，正確には紀元870年，東アングリア王国においても，ヴァイキングの嵐が吹き荒れていた。当時，東アングリアの人々は敬虔なエドマンド王を国王として仰いでいた。エドマンド王の目前には，‘骨なしイーヴァル’率いるヴァイキングの軍団が間近に急迫していた。エドマンド王の行為は，フルーリのアボーの著した『エドマンド王の受難』の中で活写されている。「たとえ余が倒れようとも，血まみれの死に脅えている国民が，愛する祖国の田畑で無事に生き延び，やがて，かつての輝かしい繁栄を取りもどすことができればよいのだが」と念じるエドマンド王に，腹心の司教は逃亡か降伏を勧める。しかし，彼は「血に飢えた盗賊どもに，眠りの最中，愛妻や子供とともに生命を奪われ惨殺された忠実にして親愛なる臣下たち，彼らより生き長らえる気持は余には毛頭ない」と返答した。エドマンド王の胸の内には，祖国と生命と愛する者たちに対する思いが廻っていたのである。これは，アッシュダウンの戦いで「生命と愛する者と祖国のために」戦ったウェセックス軍の動機と目的に完全に重なり合う。

しかし，エドマンド王は剣を捨てた。イーヴァルが放った使者に対して，彼は「余の国民の血にまみれた汝らこそ，死の報酬を受けて当然であろう。しかし，余の気持では，主イエズスのひそみにならい，余の潔癖な手を汚したくないのだ。必要とあらば，主の名にかけて，汝らの武器によって喜んで生命を落とそう」と応酬し，降伏を拒絶するのである。これがイーヴァルの激怒を買い，エドマンド王は惨殺される。フルーリのアボーは，ここで，王の最期の姿を限りなくキリストに近づけている。樹木に縛りつけられた彼の全身に無数の槍が打ち込まれ，「その苦悶たるや，あたかも高名なセバスチャンのごとく」彼は帰天するのである。この後，東アングリア王国は崩壊への道程を急いだ。

『年代記』と『大王伝』も，この事件を取り上げている。ヨークから南下したイーヴァル率いるヴァイキングの軍団は，紀元870年，東アングリアに侵入した。アッサーは，その模様を次のように述べている。「東アングリア国王エドマンドが，この軍団と激しく戦った。しかし，悲しいかな，異教徒らが徹底的に勝利を収めた。そして，彼自身も多数の臣下とともにそこで殺害され，敵軍が死の場所（戦場）をものにし，その地方全土を彼らの支配下に置いた。」これに比べると，アッサーが典拠とした『年代記』の描写はやや淡泊ではあるが，ほぼ同じ内容を伝えている。しかし，『年代記』『大王伝』ともに，「エドマンド王が戦った」と記録していることに着目する必要がある。しかも『大王伝』では，激しく戦ったと高い調子で述べられている。すなわち，この危機に瀕して，彼はただ腕をこまねいていた訳ではなかったのである。

しかし，前述したように，フルーリのアボーはエドマンド王を限りなくキリストに近づけている。つまり，「祖国と生命と愛する者」を救済するために王が最終的に選んだ手段は，武力ではなく犠牲になることであったのである。王の最期を，アボーは次のように描いている。「さながら，自分のためでなく我々のために，あらゆる罪の汚れから解放されて，縛りつけられた十字架に鞭打ちの刻印である血を残されたキリストのように，エドマンドも同様に消え去らぬ栄光を得るために血塗られた樹木に縛られて処罰を受けたのである。」このようにして，「彼は国王として殉教者として天国の宮廷に参列した」のであった。

実際には，『年代記』や『大王伝』からも想像できるように，彼が国王として剣を揮ったことは確かであろう。しかし，エドマンド王の内面では，永遠が絶対的な位置をしめていた。それゆえ彼は，いちはやく現世的な武力による勝利を放棄し，「この世の生命と永遠を交換する幸福」を選択したのである。アボーはもとより，およそ同時代のエルフリッチ，十一世紀の三つの聖歌など，堅固なキリスト教の倫理観のもとでエドマンド王を扱った文物の中から，彼を非難した文章を見出すことは不可能に近い。彼の「人生の輪郭は実に明確」で，中世のキリスト教的倫理観の枠の中に余す

ところなく収められる。

（4）

アルフレッド王の時代，ローマ教皇ヨハネス八世はカンタベリー大司教エゼルレッドの悲嘆に暮れた書簡に対して返書を送っている。その中で，教皇は大司教に対して「同胞よ，現下の火急の件に関して，貴殿が神の僕にふさわしく主の館のために障壁となって身を挺し，現世のあらゆる恐怖を排除されんことを，また，国王（アルフレッド王）に熱意を示す余り，彼に対してはおろか全ての反逆者に対して激しく抵抗することを止めぬように，忠告かつ警告を発する」と述べ，「教皇庁より書簡をもって国王に対して，貴殿に怠りなく従順であることを，また，イエズス・キリストの愛にかけて，貴殿に託した教会に益ある全ての物事に関して献身的に協力するよう，訓戒かつ勧告する書簡を手配した。」さらには「国王に対して，主イエズス・キリストの愛にかけて，貴殿に敬意を表すよう，また，貴殿の全ての権限を保証し，それらを僅かなりとも減ずることのなきよう，厳重に警告した」と付言している。教皇がアルフレッド王に宛てた書簡は現存していない。従って，カンタベリー大司教とアルフレッド王の間に何があったかは明かでない。ランスの大司教フルクがアルフレッド王やカンタベリー大司教プレイムンドに送った書簡，また，現存する当時の『治療書』などから，アルフレッド王が異教的な病気の処方に関心を抱いていたことが問題にされた，と憶測することもできる。しかし，この議論は，アルフレッド王が教会の立場から容認できない何らかの行為をしていた，という事実を確認するところで留めておこう。実際，アルフレッド王に非難の矛先を向けた中世の記録として，この教皇の書簡はごく一例に過ぎない。例えば，十二世紀に書かれた『アビンドン修道院史』においては，アルフレッド王は「さながら十二使徒の一人ユダのごとく」この修道院の所有地に建つ館を掠奪した，とまで言われている。このように，中世には，彼が現世的で反キリスト的である点を指摘した記録が少なくない。

アッシュダウンの戦いにおけるアルフレッド王の行為についても，十二

世紀に，マームスベリーのウィリアムが次のように非難している。

> 他の全ての戦闘にも増して記憶すべきは，アッシュダウンで行われた戦闘であった。この地に軍団を集結したデイン人らは，それを二つに分割した。その一方は彼らの二人の王が，他方は全ての族長が指揮した。エゼルレッドはアルフレッドとともに彼らに接近し，エゼルレッドが王の軍団と，そして，アルフレッドは族長の軍団と対決することになった。両軍は，しかと戦闘の構えを整えた。しかし，宵闇が迫り，開戦は翌日に持ち越された。夜明けとともにアルフレッドは持ち場についたが，兄は祈禱に専念するばかり，いっかな陣営を出ようとしなかった。やがて，異教徒らが激怒して突撃して来るという急報を知らされても，彼は礼拝が終わるまでは断じて一歩も動かないと主張するのであった。この王の敬虔な態度は弟には全く有利に働いた。彼は若気の無分別ゆえに余りにも不信心で，早くも軍を進めていたのである。しかし，イギリス人の軍勢は崩壊寸前，まさに敗走せんとしていた。敵軍は高所から圧倒して来るのに，キリスト教徒は不利な位置で戦っていたからである。そのときである。急遽，神の十字架に促され，王が躍り出て，兵士たちを糾合し，敵兵を蹴散らした。デイン人らは，彼の勇気と信仰の発露に恐れをなし，身を守るべく逃走することに話をまとめた。その地で，彼らの王オーセイと五人の族長，そして，夥しい数の兵士が倒れた。

ここで，マームスベリーのウィリアムが批判しているのは，やはり，現実的な若きアルフレッドの信仰心の欠如である。すなわち，ウィリアムが，この『イギリス列王伝』において非難したアッシュダウンの戦いでのアルフレッドは，フルーリのアボーの『エドマンド王の受難』と同じように，明確な倫理観をもって描かれているのである。言葉の意味はやや曖昧な感を免れないが，仮に，それを中世のキリスト教的倫理観と呼んでおく。

エドマンド王は武器を放棄することによって，現世における「祖国と生命と愛する者」を失っている。彼の統治する東アングリア王国は，事実上，彼の敗戦によって崩壊した。しかし，『エドマンド王の受難』の中では，彼の統治者としての資質は全く非難されていない。それどころか，アボーは王国を消滅に導いた彼を委曲を尽くして称賛しているのである。彼が永遠への道を選んだからである。アボーが，中世のキリスト教的倫理観に立って人生の正否を峻別していることは明かであり，序列をなした価値判断の物差しをもっていたことも推測できる。このアボーの基準でアッシュダ

ウンの戦いを見た場合，まず，祈禱に専念していた兄王エゼルレッドの敬虔さは否定の余地がない。仮に，そのため異教徒らの席巻を許して現世の敗北を喫したとしても，信仰の放棄を拒否することによって永遠の勝利を得ることができるからである。しかし，アルフレッドは異教徒の襲来に際して，この種の勝利は眼中になく，目前の勝利を求めたのである。しかも，兄王が不在となれば，代って彼が最高位の統率者となり，俗的欲望を満たすに十分な状況である。若気の至りで「不信心」かつ「無分別」の誹りを受けても致し方あるまい。次に，不運にも戦況はウェセックス軍にとって有利ではなく，敗北は時間の問題であった。この苦境を救済したのは，皮肉にも祈禱を優先させた兄王である。しかも，敵軍を圧倒したのは，十字架に護られた兄王の勇気と信仰の力であったのである。この局面においても，マームスベリーのウィリアムのみならずアボーの観点から見ても，若きアルフレッドの行為は「無分別」にして「不信心」である，と言わねばならない。

ここで明らかなことは，アッシュダウンの戦いをフルーリのアボーの立場から見た場合とマームスベリーのウィリアムの場合とが完全に重なり合う，ということである。いわゆる中世的な明白な判断を降す思考法からすれば，アルフレッドの行為は非難されて当然，ということになる。正しきものはあくまでも正しく，悪しきことはあくまでも悪いのである。それでは，アボーとウィリアムの観点から非難されるアルフレッドの人間性は，彼の中のいかなる部分であろうか。エドマンド王を限りなくキリストに近づけて描いたアボー，戦闘よりも祈禱を優先させ，さらには戦争の勝因を信仰の力としたウィリアム，もはや二人の人間観は明白である。若きアルフレッドは彼らの価値観に反するものを保有していたのである。これは，すでに述べたように，彼が教皇や大司教や修道僧からも警告された事実と無関係ではあり得ない。

（5）

マームスベリーのウィリアムは，アルフレッド王から数世紀の隔たりの

ある十二世紀の歴史家であり，今日，彼の記述をそのまま事実として受け止めることはできない。しかし，彼はいかにも歴史家らしく，各地に足を運び，伝聞も含めた夥しい資料を入手して歴史書を書いたことは，よく知られている。彼が『大王伝』のいずれかの写本を読んだ可能性は，きわめて高いとされている。そこで，冒頭で分析したアッサーの『大王伝』におけるアッシュダウンの戦いの描写とウィリアムの『イギリス列王伝』の同場面とを照合してみると面白い。その異同から，興味深い事実が浮かび上がってくるからである。

最初に，双方とも戦況の二つの局面が描かれている。簡潔にまとめると，一つは，アルフレッドが単独でウェセックス軍つまりキリスト教軍を指揮してデイン人つまり異教徒軍と交戦したことである。このとき彼が指揮したのはウェセックス軍全体であったか，それとも，彼に割り当てられた部隊かは，アッサーもマームスベリーのウィリアムも明言していない。しかし，アッサーは「キリスト教軍」と総括的に述べており，また，敵の二部隊を相手にするためにも，全体と考えてよいであろう。二つは，兄王が参戦するまで戦闘は続いており，しかも，キリスト教軍は不利な体勢で戦っていたことである。やがて，キリスト教軍が形勢を挽回して勝利を収める。

次に，着目すべきは，この戦況を描写するに際して，アッサーは勝勢と敗勢を明らかにしていないことである。一方，マームスベリーのウィリアムは実に明確に戦況の優劣を述べている。つまり，当初はアルフレッドが苦戦に陥っていたが，兄王エゼルレッドが参戦したことでキリスト教軍が勝勢に傾いた，というのである。アッサーは，前半に関しては「さながら野猪のごとく勇み立ち，俊敏に敵軍めがけ軍旗を進めた」といった類の，アルフレッドの勇敢さを強調することに留まっていて，戦闘の優劣については，全く言及していない。やがて，兄王が参戦するが，そこでも参戦後の状況については一切触れられていない。最後に，全体的な推移について説明されているだけである。戦場がウェセックス軍に不利であったこと，茨の木の周辺で激しく戦闘が繰り広げられたこと，最終的にキリスト教軍が勝利したこと，などである。しかし，最終的な勝利はアルフレッドが単

独で成し遂げたのではなく，兄王と二人で果たしたという事実は，アッサーからも十分確認できる。

もし，アルフレッドが特筆すべき武勲を挙げていたとしたら，当然，アッサーは書き留めていたであろう。ところが，アッサーは何も語っていない。とすれば，数世紀の間隔があるとは言え，戦況の現実はマームスベリーのウィリアムが伝える方に近かったのかもしれない。いずれにせよ，アッサーは自ら「この眼で確かめている」と目撃者の立場を誇示していながら，アッシュダウンの戦いの戦況に関する彼の叙述は，『イキリス列王伝』におけるウィリアムの明快さに比べると，いかにも不明瞭で筋道が通っていない。

（6）

アッシュダウンの戦いにおいて，アッサーは，なぜアルフレッドの戦功を曖昧にしたのであろうか。また，エゼルレッド王とアルフレッドが相反する行動をとったにもかかわらず，アッサーが両者とも称賛しているのはなぜであろうか。もし，当時のキリスト教的倫理観に照らして見た場合，例えば，同様の状況にあった東アングリア国王エドマンドの生涯を描いたフルーリのアボーのような見方をすれば，当然，二人の行為は正否をもって裁かれていたはずである。現に，マームスベリーのウィリアムは，エゼルレッド王を称賛し，アルフレッドは非難しているのである。

ところで，アッサーがアルフレッド王の要請に応えてウェセックス王国を訪れ，おそらくサマセットのイーストボーン近辺で王と謁見したのは，紀元885年のことであった。その経緯は，アッサー自身が『大王伝』で詳述する通りである。その中に，次のような注目すべき言及が見られる。アッサーの学識によって，ウェセックス王国は彼が勤める聖デイヴィッズの学問の恩恵を受けることができる。一方，「私の同胞は，こうした段取りが王のお眼鏡に叶って親密な関係ができれば，我々はハファイズ王から受ける参苦と危害を軽減できるのではないか，と期待していたのである。ハファイズ王は，しばしば，聖デイヴィッズの修道院と教会管区を掠奪し，

ときには，私の身内で大司教のノビスにしたように，当地を管轄している司教たちを放逐したのである。このころ，彼は私をも追放したのであった。」アッサーがアルフレッド王の招聘を受諾するに当たっては，当初はアッサーの側に現実的な問題があったのである。そのころ，ウェイルズでは様々な問題が複雑に絡み合い，危害は聖デイヴィッヅの管区にまで及んでいた。ダフェッドの王ハファイヅは自国内の聖デイヴィッヅを脅かしていたが，このハファイヅ王はウェイルズの他の王国やイギリスのマーシャ王国に脅かされ，アルフレッド王のもとに庇護を求めていたのである。従って，アッサーがアルフレッド王と密接な関係をもつことは，ハファイヅ王からの圧力を緩和するためにも，聖デイヴィッヅにとっては火急の問題であった。アッサーの歴訪は，政治的な目的に色濃く包まれていたのである。

同時に，アルフレッド王の要請に応えて彼に学問を授けてゆくうちに，アッサーは彼の熱誠に心打たれる。「まるで働き蜂のように，はるばる沼沢の上を求め行き，熱心に休みなく色々な聖書の花々を集めては，彼の心の蔵を一杯に満たしたのである。」アルフレッド王は肌身離さず小冊子を持ち歩き，祈禱書や詩篇や聖務日課などから文章を引用しては書き留めていた。その彼の習慣をアッサーは，このような美しい比喩を用いて，『大王伝』の中で叙述したのである。『大王伝』には，アルフレッド王の学問と信仰に対する真摯な態度が幾度となく強調されている。

聖デイヴィッヅの司教であったとも言われるアッサーは，このように，政治的な現実の難題を処理する使命を帯びた信仰と学問の人であったのである。その彼が，デイン人の侵攻を軍事的にも政治的にも見事に捌き，一方では学問と信仰の世界をあくなく求める不思議な人物アルフレッド王に巡り合ったのである。アルフレッド王が現実的で世俗的な事柄にも異様な関心を示したことは，先に述べたように，教会関係者から異教徒とすら疑惑をもたれたことからも推測できよう。十五世紀，ときのヘンリー六世は教皇エウゲニウス四世に「その生と死に主が奇蹟を行われた」アルフレッド王が聖者に列せられるよう請願した。しかし，これは受け入れられなか

った。十五世紀とはいえ，中世の残光がいまだに色褪せぬ時代にあっては，アルフレッド王の現実主義な一面が理解されるには，まだ時を得ていなかったのである。

聖デイヴィッズの苦境の現実に直面するアッサーにあっては，しかし，「生」と「死」の諸問題に青年のように剥き出しに取り組むアルフレッド王と親交を結ぶことによって新たなる世界を見出したのである。アルフレッド王の数知れない事績の中でも，若き日のアルフレッドのアッシュダウンの戦いにおける奇抜な行為には，ある種の驚異を感じたにちがいない。折しも，東アングリア王国では，その聖なる行為が限りなく讃えられ，後に聖者に列せられたエドマンド王が，その聖なる行為ゆえに王国を崩壊に導いていた。アッサーは，汚れなき篤信の国王聖エドマンドと兄王エゼルレッドに深い敬愛の念を抱きながらも，やがて王国の存廃の危機を果敢に乗り切るアルフレッド王の姿に新たなる共感を感じていたのである。

アッサーが『アルフレッド大王伝』を著わしたのは，紀元 893 年。混迷するウェイルズの人々に向けて書いた，と言われている。

付　記

本稿は「アッシュダウンの戦い」(『慶応義塾大学日吉紀要』人文科学第三号，昭和六十三年）の延長線上にある。この中で，『アングロ・サクソン年代記』と『アルフレッド大王伝』におけるアッシュダウンの戦いの場面は邦訳してある。

文　献

The Anglo-Saxon Chronicle, ed. C. Plummer and J. Earle, *Two of the Saxon Chronicle Parallel*, Oxford, 1892-99. 2 vols. MS. A を使用。

Asser, Vita Ælfredi Magni, ed. W. H. Stevenson, *Asser's Life of King Alfred*, Oxford, 1904.

Letters of Pope John VIII and Fulk, ed. D. Whitelock, *English Historical Documents*, c. 500-1042, Oxford, 1968.

Chronicon Æthelweardi, ed. A. Campbell, *The Chronicle of Æthelweard*, Thomas Nelson, 1962.

Leechdom, ed. T. O. Cockayne, *Leechdom, Wortcunning and Starcraft of Early England*, Rolls Series, 1864-6, 3 vols.

Ælfric's Lives of Saints, ed. W. W. Skeat, EETS, 1881-1900, 2 vols.

Passio Sancti Edmundi, Early Latin Hymns, ed. F. Hervey, *Corolla Sancti Edmundi*, London, 1907.

William of Malmesbury, De gestis Anglorum, ed. T. D. Hardy, *Wellelmi Malmesbiriensis Monachi gesta Rerum atque Historia Novella*, London, 1840. 2 vols.

Chronicon Monasterii de Abingdon, ed. J. Stevenson, Rolls Series, 1858. 2 vols.

以上は，引用および言及した中世の資料。

C. Plummer, *The Life and Times of Alfred the Great*, Oxford, 1902.

E. S. Duckett, *Alfred the Great and his England*, London, 1957.

H. R. Loyn, *Alfred the Great*, Oxford, 1967.

S. Keynes and M. Lapidge, trans. *Alfred the Great*, Penguin, 1983.

J. Huizinga, *Herbst des Mittelalters*, Herausgegeben von Furt Köster, Stuttgart, 1941.

以上は，引用した研究文献。